

(安田賞)受賞論文

社会的距離における次元性の研究

—「世界価値観調査データ」による検証—

中 野 裕 樹 也

1 はじめに —この論文の目的—

この論文では、①社会的距離においてはある程度の次元性が見られ、それはどの社会に属する人々の心理にも見られる、②その次元尺度の順序 (Order) については、同じ国に属する人々は同じ順序 (Order) の尺度を持つ傾向がある、③ある国の経済発展が進めば進むほど、その国の人々は、外集団に対して寛容になる、という筆者が立てた三つの仮説を、R. Inglehart が主宰する第2回世界価値観調査 (The World Values Survey)*の二次的分析による知見と照らし合わせて検証することを主要な目的とし、前述した三つの仮説の検証作業を通じて、人々が持つ社会的距離のありようを少しでも明らかにすることを目指している。

2 過去の社会的距離に関する研究とこの論文における問題関心

2.1 過去の社会的距離に関する研究

社会的距離とは、個人と個人の間、あるいは集団と集団の間の親近ないしは疎遠の感情の程度のことを指し^{<1>}、Bogardus が社会的距離尺度 (Social Distance Scale) として尺度化を試みたことでよく知られている。Bogardus は人種問題を念頭に置き、被験者集団と所与の民族集団及び人種集団との距離を測定するために、次のような7個の文章からなる受容—拒否の次元での尺度を構成した。(1) 結婚によって親しい縁を持ってもよい。(2) 個人的友人として同じクラブに迎えてもよい。(3) 隣人として同じ町に迎え入れても

よい。(4) 同じ職場の同僚として迎えてもよい。(5) 市民権を与えて同国人として迎えてもよい。(6) 訪問者としてなら国内に迎えてもよい。(7) 自国内から追放したい。Bogardus は実際に、移住者ではない生まれつきのアメリカ人を被験者集団にして、これらの尺度を用いた調査を行い、分析を進めたところ、イギリス人・カナダ人などのアングロ・サクソン系の白人種が受容され、日本人・トルコ人などの有色人種が拒否されるという結果を得た。Bogardus は「被験者 (アメリカ人) が被験者の属する集団とは別の集団 (カナダ人、イギリス人、トルコ人、日本人など) との間で保ちたい距離の程度」という観点から、尺度を構成し、被験者が所与の集団をそれぞれどう位置づけているかを把握するために、尺度を使用したのである^{<2><3>}。

2.2 私の問題関心

以上のような過去の社会的距離に関する研究に対して、この論文を進めるにあたっての私の問題関心は、大きく分けて二つある。一つは、Bogardus は、人種問題を念頭に置いて社会的距離尺度を構成したが、社会的距離とは、人種問題に限って見られるというものではなく、他の要素においても、人々は社会的距離を有するのではないか、という問題関心である。もう一つは、Bogardus の研究を例にとるならば、例えば被験者 (アメリカ人) は「イギリス人よりもカナダ人を受容する」「トルコ人よりもイギリス人を受容する」「日本人よりもトルコ人を受容する」というように、被験者が属する集団とは別の集団をいくつか相対的に位置づけていて、その結果として、人々は社会的距離を有するのではないか、という問題関心であ

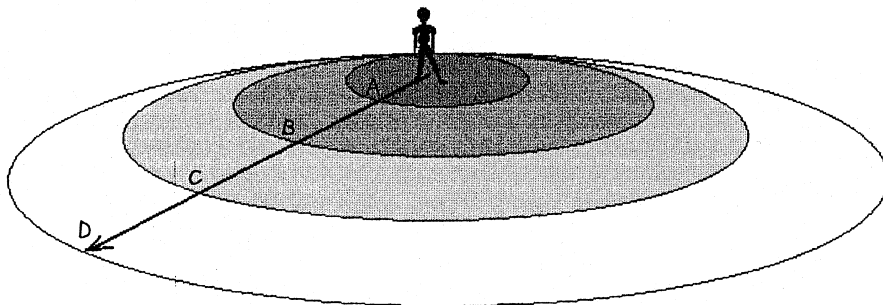
* 第2回世界価値観調査のローデータは、R. Inglehart 先生了解のもと、R. Inglehart 先生の共同研究者である、関西学院大学社会学部教授、真鍋一史先生から提供された。データは CD-ROM を媒体にして提供された。

る。ここで注意したいのは、今、この問題関心からするならば、前述した四つの集団は、カナダ人、イギリス人、トルコ人、日本人の順で受容—拒否の尺度を成していることになり、これらは一次元性があることになる、ということである。はじめに提示した仮説①「社会的距離においてはある程度の一次元性が見られ、それはどの社会に属する人々の心理にも見られる」は、以上のような考えに基づいて設定した。このことから、「被験者(アメリカ人)は、被験者の属する集団とは別の集団(カナダ人、イギリス人、トルコ人、日本人など)の人々を、7個の文章からなる受容—拒否の尺度のどこに位置づけるのか」に注目して進められた Bogardus の社会的距離の研究とは、異なるアプローチでの社会的距離の研究が可能になる。そのような意味で、この論文は、Bogardus とは別の視点から、社会的距離尺度の考え方を活用し、その有用性を問う一つの探索的な試みといえよう。

2.3 モデルの提示

下記の図Sは、前述した私の問題関心から導き出されたアイデアを図示したものである。A,B,C,D は Bogardus の研究を例にとれば、「カナダ人」「イギリス人」「トルコ人」「日本人」などといった、被験者が属する集団とは別の集団を表している。前述した例を当てはめてみるならば、A = 「カナダ人」、B = 「イギリス人」、C = 「トルコ人」、D = 「日本人」ということになる。

〈図S〉



3 仮説①及び②を検証するための分析の方法の概要

3.1 第2回世界価値観調査について

前述した仮説①及び②を検証するために、この論文においては、第2回世界価値観調査のデータを使用した。ここで第2回世界価値観調査について、若干触れておく。世界価値観調査は、米国ミシガン大学 R.Inglehart が主宰する大規模な国際比較調査である。1981年から1984年にかけて行われた第1回調査に続いて、第2回調査は1990年から1991年にかけて、世界の43カ国を対象に実施された。これら対象国の総人口は、世界人口のほぼ70%にあたる。また43カ国の経済レベルは、国民一人当たりの年間所得が300ドルにとどまる国から20,000ドルにいたる国までの大きな幅がある。さらにそれらの国々の政治・経済の形態は、資本主義、民主主義、社会主義、旧社会主義と多様である。現時点において、世界価値観調査データは通時間的なデータとはいいがたいが、それでもこの領域における調査データの中では「現在利用可能な、大規模で、信頼性の高い横断的データ(cross-sectional data)のひとつ」^{<4>}と言える。

3.2 分析方法の概要

この論文を進める上で使用したデータは、第2回世界価値観調査の変数番号で言えば、V69からV82までの部分である(ただしV74を除く)。これらの変数は「このカードにはいろいろな人のことが書いてあります。この中であなたが隣人とし

で*つき合いたくないと思う人がいましたら、いくつでもあげてください」という質問項目に対して用意されたものであり、それぞれの項目には「1 つき合いたくない」「2 そうとは思わない／わからない」という二つの回答が設定されている^{<資料1>}。この論文においては、ひとまず「隣人としてつき合いたくないと思う」ことを社会的距離における親近—疎遠の感情の程度を示す指標とした。このように社会的距離を示す指標を操作的に限定した上で、実際の検証作業を行っていくことにする。

次に、V69からV82までの変数がいくつかのグループに分けられることに注目し、グループ分けを行うことで次元性を持ちうると考えられる変数どうしをあらかじめまとめておいた。そして、これらのグループごとに分析を行い、その分析結果が仮説を検証するものであることを示すという方法を、この論文では採用した。この方法は言わば、研究者が社会現象に対する想像力・洞察力で最初にモデルを作り、それがさまざまな国にあてはまるかどうかを検討することによって、そのモデルの妥当性を確認する方法と言える。

さて、そのグループであるが、ここでは「暴力」「病人」「異人」という三つのグループ分けを考え、グループ「暴力」には「V69犯罪歴のある人」「V71左翼の過激派」「V72大酒飲み」「V73右翼の過激派」、グループ「病人」には「V75情緒の不安定な人」「V78エイズ感染者」「V79麻薬常用者」「V80同性愛者」、グループ「異人」には「V70人種の違う人」「V76イスラム教徒」「V77移民・外国人労働者」「V81ユダヤ教徒」「V82ヒンズー教徒」をそれぞれ当てはめた。

分析対象国は第2回世界価値観調査が行われた43カ国である^{**}。ただ、ここで一つ注意すべき

ことがある。前述したように、第2回世界価値観調査は国際比較を目的に行われた調査であり、本来ならば、共通の質問項目・回答の選択肢が用意されていないからではないのであるが、実際にはさまざまな理由^{***}から各国で個別の調査票が作成されており、国によっては調査されていない質問項目も存在する^{<5>}。そのため、まず第2回世界価値観調査におけるV69からV82まで（V74を除く）の変数が、各国でどのように存在しているのかを整理するための表を作成した。それが「データ有無に関する43カ国対応表」である。

4 仮説①の検証作業

4.1 検証作業手順の概要

仮説①「社会的距離においてはある程度の次元性が見られ、それはどの社会に属する人々の心理にも見られる」の検証作業を進めるため、まずV69からV82までの変数の回答「つき合いたくない」の度数分布を表わし、各グループ別に度数分布の高い順に変数を並べ、ファイ係数のマトリックスを構成させた。（これらのファイ係数マトリックスを効率よく作成するために、事前にV69からV82までの全てのクロス集計の組み合わせをSPSSを用いてパソコンの画面上に出し、クロス集計に付記されているファイ係数を拾い集めて、各国それぞれのV69からV82までのファイ係数マトリックスを作成しておいた。）マトリックスを構成させるためにファイ係数を用いたのは、ファイ係数は、2つの変数に対してそれぞれ2つの回答が用意されていて、2×2クロス表が作成できる場合、その2変数の関連の強さを表わす係数だからである。V69からV82までの変数は回答に「つき合いたくない」「そうとは思わない／わからな

※ 論文の目的には特に影響を与えることがないと判断したため、ここではあえて言及しなかったが、各国の人々が「隣人」という言葉をどのように捉えているかについては、注意を払う必要があるだろう。日本の調査では、多くの日本人が「隣人」という言葉を「自分の家の近所に住む人」という意味で捉えていると考えられるが、例えばキリスト教の影響が強い国々の人々は、そのような意味で「隣人」という言葉を捉えることはあまりないと考えられる。キリスト教において「隣人」という言葉は、「自分の近くにいる者や共同体の構成員ではなく、人間としての助けを必要とする者」^{<6>}を意味するからである。

※※ 厳密に言えば、北アイルランド（10）、モスクワ（45）は国とは言えない。モスクワ（45）はロシア（50）の調査に付加して行われた。また、調査当時、ドイツはまだ統一されていなかったことも記しておく。

※※※ 第2回世界価値観調査についてのさまざまな問題点、及びなぜそのような問題が発生したかについてはく5>中の「II データ整理の手続き」に詳しく記述されている。

い」の二つが用意されていることから、ファイ係数を用いることが今回の論文作成には適していると判断した。ファイ係数マトリックスにおいて、主対角線は1になるのであるが、これから周辺に離れていくにつれて、行も列もファイ係数の値が小さくなる場合、L.Guttmanはこの構造を「シンプレックス」と呼び^{<7>}、Guttmanの理論によれば、このように諸項目間の関係が「シンプレックス」の性質を示している場合には、尺度分析(Scale Analysis)に当てはめると、これらの諸項目は一次元の尺度を構成していることになる^{<8>}。

以上のように、各グループごとにファイ係数マトリックスを構成させ、それらが「シンプレックス」あるいは「準シンプレックス」の性質を有するか否かということで仮説①の検証を行おうと考えたのであるが、各グループにそれぞれ一次元性がありそうだと変数を当てはめたのは筆者の個人的主観によるところが大きく、実際には一次元の関係が成り立っていないかもしれない。また、各グループ内で部分的には一次元の関係が成り立っていることや二次元以上の関係が成り立っていることも十分考えられる。よって、ファイ係数マトリックスによる分析を進める一方で、POSA(Partial Order Scalogram Analysis)という分析方法を取り入れた。

4.2 POSAについて

POSAは多次元尺度分析法の一つであり、Guttmanの一次元尺度分析の考え方を多次元分析にまで拡張したものである。そもそもGuttmanの一次元尺度分析は「被調査者が1次元の連続体上のどこに位置しているかをとらえることによってその回答のパターンを知ろうとする」^{<9>}のものである。そのため尺度が二次元以上になる場合、全体としての一次元性は弱くなり、再現性指数も低くなる。ところが二次元以上の場合でも部分的には一次元的な関係が成り立っている場合があり、それらの部分関係が混ざり合っているため、全体としての一次元性が弱められていることもある。POSAは「2次元以上の場合において被調査者を空間のなかにうまく配置し、その位置を知ることによって、当該質問に対する被調査者の回答の

パターンをとらえようとする方法」^{<10>}ということができる。

前述したように、この論文においては分析の第一段階として、筆者の個人的な主観によって変数どうしをまとめ、グループ分けを行っている。このような分析方法を採用している今回の論文においては、「グループ内で部分的に一次元の関係が成り立っていることや二次元以上の関係が成り立っていることもわかる」POSAによる分析を用いる方が、「一次元性の有無判断しできない」ファイ係数マトリックスによる分析を用いるより有効であると考えることができる。よってこの論文ではPOSAによる分析を主にして進めていきたい。けれども、後述するように、POSAの作成においては、「Orderの見当をつける」ことが核心の一つとなっており、そのためにはファイ係数による分析が大変有効である。例えば、ある2変数においてファイ係数の値が高い場合、「Orderの中での2変数のお互いの位置は近いであろう」と推察できるし、ある2変数においてファイ係数の値が低い場合は、「Orderの中での2変数のお互いの位置は遠く離れているであろう」と推察できる。このように、ファイ係数による分析で「Orderの見当をつける」ことが可能になる。よって、分析の手順としては、各国各グループごとにファイ係数マトリックスを作成し、それを基にPOSAを作成していくことにする。

5 POSAの作成方法

5.1 POSAを作成するための具体的な手順

POSAを作成するための具体的な手順を、今回実際にPOSAを行うのに取り上げた変数(V69, V71, V72, V73: グループ「暴力」フランス(1)の調査データを使用)を例にして説明する。①人々の社会的距離に焦点を置いて、各質問項目の回答項目である「1つき合いたくない」「2そうとは思わない/わからない」の二つのうち前者を1、後者を0に置き換える。そうすると回答のパターンは2進級の4桁表示で表される。②まず、4つの質問項目のどれに対しても、「そうとは思わない/わからない」と答えたものから始めて、4つの質問項目のどれか1つだけに「つき合

いたくない」と答えた者、さらにその項目と親近性の高いもう一つの項目に「つき合いたくない」と答える者へと進み、そして最後に全部の項目で「つき合いたくない」と答える者に至るという理論的な格子状図形を描く。③この図形において、「線でつないでいるところは1次元の物差し（スケール）を作っているところである。物差しを作るとは、下のものは上のものよりも1の数が多く、かつ上のもので1のところは下のもので必ず1となっていることをいうのである」^{<11>}。④この理論的な格子状図形におけるそれぞれの回答パターンの頻度（度数）を計算する。

以上述べてきたように、POSAを行うためには、2進級の n 桁表示（ n は自然数）で表わされる回答パターンのケース数を全て捉える必要がある。一般的にPOSAを行うためには、専用のコンピュータ・プログラムが必要とされているが、今回、筆者はこの論文を作成するに当たり、その代用としてSPSSのコマンドを利用してPOSAを作成する方法を考えた。筆者が考えた方法はSPSSの「値の再割り当て」及び「値の計算」コマンドを利用する方法である。この方法は、以下に紹介する通り、統計的処理を施して、POSAの理論的な格子状図形におけるそれぞれの回答パターンの度数と理論的な格子状図形に乗らない回答パターンの度数の分布表を求めるというものである。この方法は比較的統計処理がしやすく、また最終的に求める度数分布表の枚数もPOSAの回答パターン数に関わらず1枚に収まり、効率的にPOSAを作成することが可能である。

5.2 SPSSのコマンドを利用してPOSAにおける回答パターンのケース数を全て捉える方法

さて、実際にSPSSのコマンドを利用して回答パターンのケース数を把握するために、以下の手順を踏んだ。①SPSSで「変容」の中から「値の再割り当て」を選ぶ。②選ぶと再割り当て先を「同一の変数へ」か「他の変数」かに指定できるので、原データ保存のため「他の変数へ」を選択する。③「他の変数へ値の再割り当て」ダイアログボックスの中の「入力変数」「変換先変数」を

指定し、「旧値と新値」ボタンを押す。④押すと「旧値と新値の定義」ダイアログボックスが表示される。この時に注意が必要なのは、新値を指定する際、変数の回答項目「2そうとは思わない／わからない」は必ず0に、「1つき合いたくない」はPOSAの2進級桁表示（は自然数）において、その変数が何桁目に位置しているかによって新値を変えなければならない、ということである。そのことを整理したものが以下の表であるが、

桁数	新値
1	$10^{1-1}=1$
2	$10^{2-1}=10$
3	$10^{3-1}=100$
.	.
.	.
n	10^{n-1}

POSAにおいて n 桁目に位置している変数の回答項目「1つき合いたくない」は 10^{n-1} を新値として指定しなければならないのである。（具体的には、今回の例では、右からV69, V71, V73, V72の順でPOSAを構成させたため、V69, V71, V73, V72の回答項目「1つき合いたくない」の新値はそれぞれ1, 10, 100, 1000となるのである）⑤①～④の作業を変数の数の分だけ行う（今回の例で言えば、その回数は4回ということになる）。⑥すべての変数の値の再割り当てが終了したら、次に⑦「変容」の中から「計算」を選ぶ。「変数の計算」ダイアログボックスの中の目的変数を指定し、数式の中で値の再割り当てを終えた変数をすべて加算するように指定する。⑧このようにして、値の計算を行った結果である目的変数を度数分布で表せば、すべての回答パターンのケース数を捉えることができる。〈表3〉～〈表5〉はフランス（1）を例にとって、実際に作成した度数分布表であるが、ここで注意すべきことは例えばValueが0.00のFrequencyは回答パターン0000のケース数を、Valueが1.00のFrequencyは回答パターン0001のケース数を示しているということである。SPSSではValueを回答パターンとしては扱っていないため、POSAの

回答パターンの中で自身より左側に1が存在しない0(例えば回答パターン「0011」の「00」など)は度数分布表に表わした際に文字化されないので注意が必要である。

5.3 SPSSのコマンドを利用して POSA における回答パターンのケース数を全て捉える場合の問題点、及び効率化を図るためのいくつかのアイデア

以上、SPSSのコマンドを利用した POSA 作成方法について述べてきたが、この方法の問題点は「回答パターンのケース数を全て捉えることはできるものの、その後の POSA の理論的な格子状図形作成は、手作業になってしまい、多大な労力を必要とする」ということである。ただ、POSA の回答パターンが何パターンあるのか、は事前に容易に把握することができるので、「POSA フォーマット・シート」とでも言うべき用紙をあらかじめ用意しておけば、格子状図形作成にかかる時間の短縮を図ることができる。

以上述べてきた POSA 作成の手続きを SPSS シンタックスで表わしたものを資料として作成した。この SPSS シンタックスをフロッピーディスク等で保存しておけば、分析する国によって、シンタックス上の変数指定部分をその都度変更しなければならない、という手間はあるものの、POSA 作成において効率化を十分図ることができる。

5.4 POSA の理論的な格子状図形を作成するにあたって踏まえた手順

さて、各国の POSA の理論的な格子状図形を作成する際、留意したポイントは以下の7点である。① POSA は各グループ内の諸変数が3変数以上存在する各国各グループデータについて行い、2変数以下しか存在しない各国各グループデータについては、POSA を行わなかった。よって「データ有無に関する43ヵ国対応表」を見れば

わかるように、単純計算では調査対象国43ヵ国×各国3グループ=129枚の POSA が得られるはずであるが、実際には南アフリカ(15)及びポーランド(25)のグループ「暴力」「病人」「異人」、スイス(26)のグループ「病人」「異人」、ブラジル(28)の「異人」、中国(39)のグループ「暴力」を除いた計119枚の POSA を今回の分析では作成することになる。②最初に各国各グループのファイ係数マトリックスを作成する。ここでマトリックスの中でシンプレックスもしくは準シンプレックスの形をとる変数の並びを見つけ、各 POSA における次元尺度 Order の見当をつける。③その Order に基づいて、SPSS コマンドを実行し、回答パターンのケース数を捉える。④仮説②「同じ国に属する人々は、社会的距離における次元の尺度において、同じ順序(Order)の尺度を持つ傾向がある」の検証作業を効率的に進めるため、まず、Order0000→1000→1100→1110→1111(あるいは00000→10000→11000→11100→11110→11111)に Frequency が集まるよう、意識的に操作する。⑤Perfect types(再現率)*が80%以上あるかどうかをチェックする。⑥80%以上あれば、その POSA におけるモデルは有効とし**、Frequency が集まっている Order を確認する。⑦80%未満である場合、Perfect types が80%以上になるよう再操作する。

6 POSA による分析結果の提出と考察

次に POSA の分析結果を述べていくが、その前に POSA の性質について明記すべきことがある。それは、POSA の結果として表わされる付置図は、各グループで考えられる回答パターンの類似性によって付置したものであって、「あくまでもスタティックなものであって、どのタイプからどのタイプへ変化していく、といったダイナミックなコースを示すものではそもそもない。あくまでも一時点におけるいくつかのタイプの人た

※ この論文では Perfect types と再現率を同義に扱っているが、これは参考文献<12>中の「(格子状)図形尺度に乗っているものの全サンプルに対する比率を perfect types といい、(中略)この数値は次元尺度分析と同じように、どれだけ格子状図形に適合するかを示す再現率と考えることができる」という記述をその根拠とした。

※※ 「80%以上を有効とする」という基準は林知己夫の「(再現率が)80%を下るのは好ましくない」<13>という記述を根拠において設定した。

ちの類似性をプロットしたにすぎないものである(すなわち、この図でそばにあるタイプは似ていて、離れたところにあるタイプは似ていないという意味で)。しかし、これを…00000型から…11111型へと進化していくというモデルを便宜的に想定してみることは、それほど間違った結論に到達するとも思われない^{<14>}ということである。このような視点から、POSAによる分析結果を見てみる。5.4において、POSAによる分析を行うにあたって注意したポイントを記述したが、「資料のPOSA分析結果」は前述した7つのポイントをふまえて作成された計119枚のPOSAによる分析結果である。この結果を見てみると、各国各グループのPerfect types(再現率)は、80%以上が確保されている(チェコスロバキア(33)のグループ「異人」のPerfect typesは79.5%であるが、四捨五入して80%とした)。したがって、前述した第2回世界価値観調査のデータとしての性質、及び<13><14>で示されている林知己夫及び鮑戸弘の記述を前提に考えれば、扱った変数が3～5個という限られた範囲の中での今回の分析結果においてははあるが、仮説①「社会的距離においてはある程度の次元性が見られ、それはどの社会に属する人々の心理にも見られる」はひとまず検証できたと考えることができる。

7 仮説②の検証作業

7.1 検証作業手順の概要

仮説②「同じ国に属する人々は、社会的距離における次元の尺度において、同じ順序(Order)の尺度を持つ傾向がある」の検証作業を進めるため、<表6>～<表11>を作成した。これらの表を作成した目的は、POSAによる各国各グループの分析結果によって得られる次元尺度の中で、最も回答頻度が集まっているOrderはどの程度のパーセンテージを確保しているのか、またそのOrderはどのような順序で成り立っているのかを確認するためである。POSAによる分析の場合では、ある次元尺度のパーセンテージは、その次元尺度を構成している回答パターンのすべての頻度を足したものを、POSAの理論的な格子状図形にのっている総回答者数で割るこ

とによって求めることができる。今回は、この方法を利用して検証作業を進めた。

さて、<表6>～<表8>は最も回答頻度が集まっているOrderはどの程度のパーセンテージを有しているのかを、<表9>～<表11>はそのOrderはどのような順序で成り立っているのかを整理したものである。<表6>～<表8>の中で「0000(00000)」列に記されている数値は各国各グループの中で、回答パターン「0000(00000)」のパーセンテージ、「1111(11111)」列に記されている数値は、回答パターン「1111(11111)」のパーセンテージを表わす。また、これらの表で、筆者は、「First Course」「Secondary Course」という指標を導入した。これらの指標は、ある次元尺度の一部と考えることができる。これらの表ではCourseという指標はある次元尺度のパーセンテージから「最初」と「最後」、POSAによる分析においては「0000(00000)」と「1111(11111)」のパーセンテージを引いたものを意味する。Firstは「最初」と「最後」を除いた次元尺度のパーセンテージの中で最もパーセンテージが高いもの、Secondaryは二番目にパーセンテージが高いものである。

First Course、Secondary Courseの詳しい定め方は後述するが、その前に触れておくべきことがある。<表8>を見れば明らかであるが、今回の分析においてグループ「異人」では、各国とも全体的に回答パターン「00000」のパーセンテージが高い。そのため「00000」以外の回答パターンのパーセンテージは低くなる。グループ「異人」においても、当然、First Course、Secondary Courseは存在するが、このような場合、Secondary Courseを特に取り上げる必要性はないと判断した。そこでPOSAの理論的な格子状図形から得られる次元尺度の中で、最もパーセンテージが高いものから「00000」と「11111」のパーセンテージを引いたものをFirst Courseとして表に記した。ただし、First CourseとSecondary Courseのパーセンテージの値が非常に近く、同値と見なすことができる場合はCourse判別不能とした。

7.2 First Course、Secondary Course の定め方

グループ「暴力」「病人」についての **First Course、Secondary Course** の定め方は以下の4つの点に留意して行った。①「0000」から「1111」までに到達するには POSA の理論上、3つの階層がある。実際に POSA の理論上の格子状図形を見れば、一目瞭然であるが、各回答パターンに「1が一つ存在するのか」「1が二つ存在するのか」「1が三つ存在するのか」によって、言い換えれば「つき合いたくない」という回答をグループ内の「1つの質問項目に対してのみ示したのか」「2つの質問項目に対して示したのか」「3つの質問項目に対して示したのか」によって、3つの階層に分けられている。つまり、尺度上「0000」から「1111」まで到達するには、3つの回答パターンを経なければならない。原則として **First Course** は前述した3つの回答パターンのうち、少なくとも2つの回答パターンにおいて、その頻度がそれぞれ属する階層内の他のどの回答パターンの頻度よりも抜きんで大きいコース（階層内で頻度の大きさが2番目の回答パターンと比べて2倍以上、というのを一応の目安とした）と定めた。②①の要件を満たしていない場合、各階層内で一番比率の高い回答パターンを見つけ、それらがうまくつながるようなコースを探し、それを **First Course** とする。①の要件を満たしていない場合、**Secondary Course** が存在する可能性は高いと考えられるので、**Secondary Course** を探す。ただし、**First Course** と **Secondary Course** のパーセンテージの差が10%以上ある場合には、**First Course** のみを表に記載した。③①の要件を満たしているにも関わらず、**First Course** を構成しているパターン以外の回答パターンの中で、無視できない大きさの頻度を持つ回答パターン、及びその回答パターンを含むコースが存在するケースがある。その際はそのコースを **Secondary Course** とした。④**First Course、Secondary Course、Third Course** のパーセンテージの差が10%以内である場合、**Course** 判別不能とした。

7.3 知見の読み取りと考察

以上、**First Course** 及び **Secondary Course** の

定め方について記してきたが、<表6>～<表8>の「0000～1111 (00000～11111)」列に記されている数値は、各々のグループの中で見られる一次元尺度のうち、最も回答頻度が集まっている **Order** のパーセンテージを表わす。言い換えれば、「0000～1111 (00000～11111)」=「0000 (00000)」+**First Course**+「1111 (11111)」である。そして、この **Order** をそれぞれ **First Order** とし、まとめたのが<表9>～<表11>である。

さて、二番目の仮説を検証するために、**First Order** のパーセンテージ、すなわち、<表6>～<表8>における「0000～1111 (00000～11111)」列の数値をしてみる。各国各グループによって、70%台から90%台という幅はあるものの、また、グループ「異人」においては **Order** を成り立たせる変数の数が3～5個とばらつきがあり、これらを一緒に比較することにはやや問題も残るが、**Course** 判別不能であった数グループを除き、各国いずれのグループにおいても70%以上という高いパーセンテージを示しており、これらの **Order** =一次元性の尺度は各国民の大勢が保有しているものだと言える。この知見により、仮説②「同じ国に属する人々は、社会的距離における一次元の尺度において、同じ順序 (**Order**) の尺度を持つ傾向がある」は、ひとまず検証できたと考えることができる。

8 残された問題と新しい仮説の設定

さて、以上のように仮説①及び②はある程度実証されたが、それでもなお、仮説②にあたる部分で2点、疑問が残った。まず、1点目は「なぜ、**First Order** のパーセンテージは、国によって70%台から90%台とばらつきが見られるのか」ということである。2点目は、例えば<表6>のアイスランド (21) とブルガリア (36) を例に述べると、アイスランド (21) とブルガリア (36) の『「0000」～「1111」』のパーセンテージは、それぞれ88.3%、88.5%と、値としては大変近い。ところが、「0000」のパーセンテージはそれぞれ31.6%、18.7%、「1111」のパーセンテージはそれぞれ12.1%、55.6%と幅がある。「各グループ

(とりわけグループ「暴力」と「病人」において)の**First Order**としてのパーセンテージは近値であっても、**Order**を構成している各々の頻度を見ると、パーセンテージに差がある国々がある。なぜ、このような結果が得られたのか」が2点目の疑問である。これら2つの疑問に対して明確な解答を得ることは大変難しいことであるが、例えば**R.Inglehart**は自らの論文「近代化とポスト近代化：経済発展と文化変化と政治変動の相互の関係の変化」の中でこれら2つの疑問を解き明かす道標の一つを示している。

R.Inglehartは前述した論文の中で「安全であることが寛容を導くということは、安全でないことが外国人嫌いを導くということのちょうど逆である。生存に関する余裕やゆとりが少ないほど、人はよそ者を脅威として恐れるが、そのよそ者が外国語を喋り、異なる価値観を持ち、理解不可能で、行動の予測がつかないような場合はなおさらである。現存する人口を養うだけの土地しか持たない農耕社会、あるいは狩猟・採集社会においては、外国人グループの到来は生存への直接的な脅威となる。そういう状況では、外国人嫌いがほぼ確実に起こるのである。一方、経済成長を遂げた先進技術社会においては、外国人は許容され、(少なくとも雇用者からは)歓迎すらされる」^{<15>}と述べているが、この**R.Inglehart**の指摘は、人々が持つ社会的距離のありようを明らかにすることを目的とするこの論文において、極めて興味深いものである。筆者はこの**R.Inglehart**の指摘より「ある国の経済発展が進めば進むほど、その国の人々は、外集団に対して寛容になる」という新しい仮説(仮説③)を設定した。次にこの新しい仮説の検証作業を、今回、**POSA**の分析結果を使用して進めていきたい。

9 新しい仮説(仮説③)の検証作業

9.1 検証作業の手順

実際の検証作業は以下のポイントをふまえて行った。①縦軸にはグループ「暴力」「病人」において「1111」の回答を示した人々、及びグループ「異人」において「11111」の回答を示した人々、つまりグループ内のすべての質問項目において

「つき合いたくない」と回答した人々の割合、横軸には、1991年の国民一人当たりの国民総生産をとり、各国の位置を散布図の形で表わした。②縦軸に「1111」及び「11111」の回答を示した人々の割合のみを用いたのは、第2回世界価値観調査の質問文を再検討した結果、「1111」「11111」の回答を示した人々の割合のみ用いるのが、今回の分析には適当だと判断したためである。今回の分析で用いた第2回世界価値観調査のV69からV82までの変数(V74を除く)は「このカードにはいろいろな人のことが書いてあります。この中であなたが隣人としてつき合いたくないと思う人がいましたら、いくつでもあげてください」という質問文中の質問項目に対する回答項目変数として用意されている。この質問文において、グループ内の全ての質問項目に対して「つき合いたくない」と答える人は、意思表示が明確であり(例えば、「0000」の回答を示した人々は、グループ内の全ての質問項目に「つき合いたくない」とは思わないと回答していることはわかるが、「つき合いたくない、とは思わない」という回答は、グループ内の質問項目に示されている人々のことを「つき合いたい」と思っていることを示しているのか、「つき合いたい、つき合いたくないのどちらでもない」と思っていることを示しているのか、これだけでは判断できない)、各国におけるいわば「代表選手」として適していると考えた。③横軸に用いた1991年の国民一人当たりの国民総生産データは世界銀行の『世界開発報告1993』(世界銀行東京事務所、1993年)230-231頁を用いた。**R.Inglehart**は先に、縦軸に主観的よい状態度指標、横軸に1991年国民一人当たりの国民総生産を用いて「経済発展と主観的よい状態度」の各国プロット図を作成しているが^{<16>}、彼がこの各国プロット図で用いた国民総生産データと出典は同一である。④『世界開発報告1993』にはアイスランド(21)、東ドイツ(34)、スロベニア(35)の国民総生産データが記載されていない。そのため、これら3カ国及び、北アイルランド(10)、モスクワ周辺地域(45)は今回の分析から除外した。

9.2 知見の読み取りと考察

前述した4つのポイントを踏まえて作成した散

布図が<図2>~<図4>である。これらの散布図からは注目すべき知見が得られたので、それらの知見から推察されることもまとめて記しておく。①『各国における経済発展の程度』と『グループ「暴力」及び「病人」内の全ての質問項目に「つき合いたくない」と答えた人々の割合』との関係についてであるが、<図2>及び<図3>を見ればわかるように、全体的に見て経済発展の進んでいない国々は、経済発展の進んでいる国々と比べて、「1111」の回答を示す人々の割合が高い。今回の分析の結果に限ってではあるが、『各国における経済発展の程度』と『グループ「暴力」「病人」内の全ての質問項目に「つき合いたくない」と答えた人々の割合』との間には、ある程度相関関係が見られる。②<図2>及び<図3>における各国のプロットは、全体的に見て、反比例の曲線上に乗っている。これは、「1111」の回答を示す人々が、各国における「代表選手」であるという考えによれば、R.Inglehartの言う「欠乏の社会から安全の社会への移行」¹⁷⁾が、グループ「暴力」「病人」について「つき合いたくない」と答える人々の割合を急激に減少させていると考えることができる。また、その一方で、経済成長によっては、もはやそれ以上、「つき合いたくない」と答える人々の割合を減少させることができなくなる「閾 (threshold)」が存在すると推察できる。その「閾 (threshold)」であるが、今回の分析結果を見る限り、国民一人当たりの国民総生産が6000ドル程度(90年のポルトガルと韓国の経済レベルがほぼ相当する)のところだと考えることができる。③『各国における経済発展の程度』と『グループ「異人」内の全ての質問項目に「つき合いたくない」と答えた人々の割合』の関係についてであるが、<図4>を見ればわかるように、どのような経済レベルの国々においても、「11111」の回答を示す人々の割合はほぼ一定である。この知見は、①及び②で示した知見と比べて対照的である。これらの知見から考えられることは、「暴力」及び「病人」グループの質問項目と「異人」グループにおける質問項目は、「第2回世界価値観調査」において同じ質問文中にある質問項目ではあるが、少し性質が違うのではないだろうか、ということである。この考えは、前述したPOSAによ

る分析において、グループ「異人」では、各国とも「00000」のパーセンテージが高かったという知見とあわせて考えられることである。

これまで<図2>~<図4>を基にして、知見の読み取りを進めてきたが、今回の分析結果から、R.Inglehartの指摘より導き出された仮説③「ある国の経済発展が進めば進むほど、その国の人々は、外集団に対して寛容になる」は、グループ「暴力」及び「病人」などの外集団についてはひとまず検証できたと言えよう。

10 まとめ

以上、この論文においては、人々が有している社会的距離に関して筆者が設定した三つの仮説に対しての検証作業の手続き、及びその分析結果、そして考察について記してきた。こうして、三つの仮説それぞれに対して「ある程度実証性がある」と言うことができるという分析結果が得られた。ここで最初の問題関心に立ち戻ってみると、人々が各々有している社会的距離について、一つの「ストーリー」を記すことが可能となる。すなわち、仮説①の検証結果より「人々は、自分の心の中で、自分自身が属する集団とは別のいくつかの集団を相対的に位置づける。その結果として人々は社会的距離を有し、その社会的距離は一次元の尺度を持つ」、仮説②の検証結果より「人々が持つ社会的距離における一次元尺度の順序(Order)は各々独自に作られているのではなく、その人が属する社会の影響を受け、作られていく」、R.Inglehartの指摘から導き出された仮説③の検証結果より「人々が一次元尺度の順序(Order)のどこに位置するかについても、やはりその人が属する社会の影響を受ける。中でも、社会の経済成長の程度が大きな影響を与えている」というストーリーである。もちろん、このストーリーは、三つの仮説の検証結果よりさらに一般化・抽象化・理論化を進めた内容も含んでいるため、そのすべてが実証されたものとは言えない。けれども、今後はこの「ストーリー」を足がかりにして、新しい仮説を設定して分析を行っていくことが、この領域における研究をより発展させることにつながるだろうと考える。

11 本論の補足及び問題点の整理

ここでは本論の補足として、今回の分析結果から得られた、当初の仮説検証の目的からはややはずれるものの、決して見逃すことのできない知見、言わば「分析結果の副産物」とでも言える知見の読み取りを試みてみたい。また、この論文を進めるにつれて発生した問題点についても言及していきたい。

11.1 本論の補足

仮説②「同じ国に属する人々は、社会的距離における次元の尺度において、同じ順序 (Order) の尺度を持つ傾向がある」の検証作業を進める過程で<表9>~<表11>を作成した。これらの表は各国各グループにおける **First Order** を整理したものである。これらの表から **Order** に共通性が見られる国々を検討してみた。これだけではわかりにくいので、いくつかの変数をまとめて **Order** としてとらえ (<表9>~<表11>に「チェック欄」を設け、似た **Order** をチェックした)、**Order** に共通性が見られる国々を抽出し、整理したものが<表12>~<表16>である。<表12>~<表14>はグループ「暴力」から作成した表であり、<表15>と<表16>はそれぞれグループ「病人」「異人」から作成した表である。表に添付されている図は、論文の最初で図Sとして示した筆者のモデルにそれぞれの **Order** を当てはめてみたものである。

まず、グループ「暴力」についてであるが、①今、仮にV69とV72及びV71とV73をそれぞれまとめて捉えて、(V69, V72) → (V71, V73) という **Order** を考えてみた場合、<表12>で示されているように、分析対象国40カ国中26カ国(65%)がこのモデルにあてはまる。②また、このモデルにあてはまらない国々の **Order** を見てみれば、<表13>で示されているように、地理的に大変近い7カ国が同じ **Order** (V72→V73→V71→V69) であった。さらに、③<表14>で示されているように、これもまた地理的に大変近いラトビア、エストニアの2カ国が同じ **Order** (V72→V71→V69→V73) であった。これは大変興味深い知見だ

と考えられる。拡散-収斂理論の基本的な考え方を援用すれば、①の **Order** が全体の65%を占め、それに加えて②、③のような **Order** が存在するということは、「暴力」というグループにおいて、「人々は①のような **Order** をもともと持っていて、②、③のような **Order** は特殊なものとして派生している」という「ストーリー」を提示できるし、他方で「世界のグローバル化に伴い、人々が持つ社会的距離における次元の尺度も一つにまとまりつつあり、1990-91年期はその途上にある」というもう一つの「ストーリー」を提示することも可能である。

次に、グループ「病人」についてであるが、今、V78とV80をまとめて捉えて、V79→(V78, V80)→V75という **Order** を考えてみた場合、<表15>で示されているように、分析対象国40カ国中25カ国(62.5%)がこのモデルにあてはまる。

最後に、グループ「異人」についてであるが、V70, V77, V82をまとめて捉えて、V76→(V70, V77, V82)→V81という **Order** を考えてみた場合、<表16>で示されているように、12カ国がこのモデルにあてはまる。分析対象国の中で北・西欧諸国は合計16カ国あるが、前述した12カ国は、そのうちの10カ国+アメリカ合衆国、カナダの2カ国であり、距離的・文化的にも近いと考えられるこれらの国々が同じ **Order** を持つ、という知見はやはり注目すべきことと言わなければならない。

11.2 問題点の整理

最後に、この論文における問題点について記しておきたい。この論文における問題点は大きく分けて、方法論とデータ処理上の諸手続きの二点になるであろう。

方法論に関する問題点であるが、この論文においては社会的距離における次元性を検証するために、その分析手法として、L.Guttman が考案した POSA のアイデアを採用している。Guttman が開発した尺度分析法の特徴は「順序尺度であって、間隔尺度ではない」^{<18>}という点であり、それは「ガットマン尺度は尺度の完全な数量化をめざすものではなく、各人の位置をたんに順序づけたにすぎない」^{<19>}ということを意味

する。〈表9〉～〈表11〉において、Orderに共通性が見られる国々を検討してきたが、ここではOrderを構成する変数の並び方は確認することができるが、それぞれの変数が尺度的にどれほどの間隔を持って、並んでいるのかは定かではない。このような状況の中で、各国を安易に比較検討することは危険性を伴うと言わなければならない。また、Guttman尺度の問題点として、「一つの反応カテゴリーに回答が集中している意見項目の場合には再現性がいきおい高くなる傾向にある」^{<20>}ということがあげられる。グループ「異人」において、ほとんどの国々で「00000」のパーセンテージが高い値を示したが、このような場合Guttman尺度は、分析の上で必ずしも有効な尺度とは言えない。はからずもこの論文において、Guttman尺度の問題点の一つを示す結果になってしまったと言わなければならない。

次にデータ処理上の手続きに関する問題点を記しておきたい。まず、これはデータの二次的分析を行う場合、必然的におきる問題だとも言えるが、もともと「第2回世界価値観調査」は別の目的で行われた調査であるため、今回の論文で用いた質問項目は、社会的距離における一次元性を測定する上で最適な項目であったとは言にくい。つまり、現在利用可能な調査データの中でも、大規模で、信頼性の高いデータの一つである「第2回世界価値観調査データ」を利用したにもかかわらず、この論文は試験的な論文であると言わざるを得ない。今後、この領域の研究を進展させるには、社会的距離における一次元性の検証に向けて、データの二次利用ではない、それ自身を目的とした質問紙調査を行う必要がある。ただ、これを行うためには多大な時間・労力・費用を必要とする。言い換えれば、今回「第2回世界価値観調査データ」を二次的に利用したからこそ、その数6万弱に及ぶ大量のサンプルを基にして分析が進められたと言える。研究者の個々の研究方針によって、データの二次利用という形をとるのか、それ自身を目的とした調査を行い精度の高いデータを得るのか、研究方法を選択していくことが肝要だと考えられる。

また、本来、質問紙（調査票）とデータはセットで考えられるべきものである。この論文においても各国の質問紙（調査票）に記載されている、つまり実際に現地で調査されている質問項目とデータとして記録されている項目に整合性があるかどうかをチェックする必要があったのだが、この作業は不十分であった。今回、論文作成に際し、分析対象国43カ国の約半数にあたる21カ国分の各国質問紙（調査票）のコピーを得ることができた^{**}ので、分析に使用した変数部分の各国語の翻訳を試み、データとの整合性を調べてみた。その結果、「第2回世界価値観調査」の各国質問紙（調査票）と各国データは、完全には整合していないことが分かった。例えば、スイスの質問紙（調査票）には「homosexuals」、つまり「同性愛者（V80）」の質問項目は存在する。しかし、の「データ有無に関する43カ国対応表」を見れば分かるように、データとしては記録されていない。

このように質問紙（調査票）にある質問項目とデータの整合性を丹念にチェックし、その結果を残しておくことが、再現性と追体験を可能にさせ、この領域における研究を進展させる手助けになることを留意しておかなければならない。

<付記>

米国ミシガン大学のR.Inglehart先生には、「第2回世界価値観調査データ」の二次利用の承諾だけでなく、温かい励ましのお言葉をいただいた。また、R.Inglehart先生の共同研究者であり、私の論文の指導教授でもある真鍋一史先生には、この2年間を通じ、「物事を科学的に捉えるとはどういうことなのか」という社会科学を進める上で根本となる考え方から実際の論文指導まで、終始熱心にご指導いただいた。吉備国際大学の栗田真樹先生には、「第2回世界価値観調査データ」の利用方法及び統計解析上のさまざまな技法についてご教示いただいた。この論文では、POSAの新しい作成方法が記されているが、それは栗田先生との語らいの中から生まれたものである。また、私の古くからの友人でもある東京外国語大学の清水健也君には、「第2回世界価値観調査」に

※ 第2回世界価値観調査で使用された21カ国分の各国質問紙（調査票）のコピーは、ローデータと同様、R.Inglehart先生了解のもと、真鍋一史先生より提供された。

おける各国質問紙の翻訳にご協力いただいた。この論文においては、質問紙とデータの対応を全てチェックすることはできなかったが、それでも清水君の協力がなければ、スイスの「homosexuals」項目のデータ欠落について言及することはできなかった。西宮アガペー教会の妻一成牧師には、「隣人」のキリスト教的解釈についてご教示いただいた。また、私の後輩である関西学院大学社会学部の長山あかねさんには、夏休みにも関わらず、POSA作成における煩雑な作業を手伝っていただいた。この論文作成にあたっては多くの方々のご指導・ご協力があったことを記し、心からお礼を申し上げたい。

<参考文献>

- <1>鈴木康平「社会的距離」及び岡本英雄「社会的距離尺度」森岡清美、塩原勉、本間康平編集代表『新社会学辞典』（有斐閣、1993年）635-636頁
- <2>Muzafer SherifとCarl I. Hovland、柿崎祐一監訳、島久洋、水島基喜訳『社会的判断の法則—コミュニケーションと態度変化—』（ミネルヴァ書房、1977年）205頁
- <3>中村陽吉『心理学的社会心理学』（光生館、1972年）186-187頁
- <4>真鍋一史、栗田真樹、劉志明、加藤敬子、李鍾煥「R.イングルハート（R.Inglehart）の『世界価値観調査（World Values Survey）データ』の二次的分析のための準備作業」（『関西学院大学社会学部紀要』第75号、1996年）67頁
- <5><4>と同書 71頁
- <6>「となりびと 隣人」泉田昭、宇田進、服部嘉明、舟喜信、山口昇編集『新聖書辞典』（いのちのことば社、1985年）891頁
- <7>三好稔『心理学と因子分析』（誠信書房、1962年）227頁
- <8> <7>と同書 228頁
- <9>真鍋一史『社会・世論調査のデータ解析』（慶応通信、1993年）121頁
- <10><9>と同書 121頁
- <11>林知己夫、鮑戸弘共編『多次元尺度解析法』（サイエンス社、1976年）211-212頁
- <12>西田春彦、新睦人編著『社会調査の理論と技法（Ⅱ）アイデアからリサーチへ』（川島書店、1976年）125頁
- <13><11>と同書197頁
- <14><11>と同書237-238頁
- <15>Ronald Inglehart、真鍋一史訳「『近代化とポスト近代化』：経済発展と文化変化と政治変動の相互の関係の変化」（『関西学院大学社会学部紀要』、第77号、1997年）138頁
- <16><15>と同書147頁
- <17><15>と同書146頁
- <18><12>と同書121頁
- <19><12>と同書121-122頁
- <20><12>と同書126-127頁